

久保堅一

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 381 号
学位授与年月日	平成23年 7月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	『源氏物語』の研究
論文審査委員	(主査) 教授 佐倉 由泰 教授 佐藤 伸宏 教授 佐藤 弘夫 准教授 横溝 博

論文内容の要旨

本研究は、『源氏物語』の続篇(匂兵部卿卷～夢浮橋卷)を主な研究対象とし、主要な登場人物をめぐる物語の分析を通じて、続篇の物語世界の特質を明らかにすることを目的とする。

続篇を『源氏物語』の単なる後半部として捉えることは生産的ではない。続篇は、既に築き上げられた正篇(桐壺卷～幻卷=光源氏の物語)の世界を相対化することで創り上げられてゆくという運動性を有する物語世界であり、そのように把握することによって、『源氏物語』がその内部でどのような問題系を継承しているのか、それをいかに変質させているのか、あるいは、何を断ち切っているのかといった問題を浮かび上がらせることができる。続篇世界の特質を明らかにすることは、『源氏物語』内部の動態や、物語が行き着いた最終地点の性質を探ることと密接に関連していると言えるだろう。

よって本研究は、可能な限り正篇のありようを視野に入れ、それとの関係を探りながら続篇世界の特質に迫るように試みた。

これまで『源氏物語』研究史においては、正篇から続篇にかけて主題が〈発展〉してゆくとする連続を見る見解と、物語の方法や原理が正篇と続篇とでは〈断絶〉しているとする不連続を見る見解とが提示されていた。こうした一見相反する指摘について、二者択一的に捉えることは続篇世界を理解する上で有効ではない。両者の見解には一方は主題、他方は方法・原理と、論及されるレベルに差異があるのであって、必ずしも矛盾するものではないのである。よって、むしろ連続の相も不連続の相も続篇世界の多様性として包括的に捉えてゆくことが読解の生産性につながるはずである。以上のような観点から、本研究はいずれかに偏った視座を設けることなく、広く正篇・続篇の関係を捉えてゆく。

第一章 続篇世界の諸相

本章は、個々の登場人物が担う問題の分析をとおして続篇世界の性質を把握する考察を収めた。第一節で注目する弘徽殿大后は正篇にあって続篇に通じる人物として捉えられるため、その考察を本研究の最初に置いた。第二節は薫の道心をとおして続篇世界の基調をうかがう考察であるため、第二章「薫の物語」ではなく本章に収めた。第三節、第四節の大君、中の君については続篇における親子や家族の関係について考察したものである。

第一節 弘徽殿大后の孤独

弘徽殿大后は正篇の第一部に登場する人物であって、続篇の人物ではない。だが、宇治十帖の始発・橋姫巻に語り出される八の宮の過去に弘徽殿大后は抜き難く関わっており、八の宮を光源氏の栄華の世界から背けさせたのは、ほかならぬ弘徽殿大后と言って過言ではない。また、大后自身が、桐壺巻以来、光源氏に最も敵対する位相にいた人物である。弘徽殿大后とは正篇にあって早く続篇の世界に一脈通じている人物として捉えられるだろう。本章が弘徽殿大后論から始まる所以である。

本節の研究は特に母としての立場から大后を捉え、息子の朱雀帝を護ろうとしつつも、その朱雀帝が離れて敗北してゆく姿に着目した。

大后の言動には息子の治世を護ろうとする確かな意志があったと読めるのだが、味方であるはずの父右大臣たちとは足並みが揃っておらず、大后は孤軍奮闘しているかのごとき立場にある。そして何よりも息子の朱雀帝が大后から離れてゆき、その結果彼女は敗北する。その姿は孤独なものと言えよう。以上のような大后の姿は、その人物造型に深く関わっていた『史記』に描かれる呂太后の姿と重ねられる。息子の治世のために闘いながらも、彼に非難され、先立たれるという呂太后の孤独な哀しみは、弘徽殿大后にも通じる。正篇ではその孤独や悲哀に寄り添う者は誰もいないのだが、光源氏の世界から逸脱した者の複雑な造型は続篇世界において大きく展開してゆくこととなる。弘徽殿大后の生やそこに明滅していた哀しみは、続篇への水脈の一つと言える。

第二節 薫の道心と続篇世界

『源氏物語』続篇の中心人物である薫は、物語の中で自他ともに認める道心深い人物として語られている。そしてその道心については、正篇の主人公・光源氏のそれを継承、発展させたものであるとする見解が既に提出されている。だが、薫の道心は光源氏の道心ほどの重みを物語内で持ち得ているのだろうか。

本節の研究は、薫の道心の位相とそれと連関する続篇世界の性質について考察を加えたものである。

薫の道心が光源氏の実子であることを疑う自身の出生の暗部とそれに由来した憂愁に関わって形成されたものであることは、続篇の始発・匂兵部卿巻において早くに読み取れる。橋姫巻で薫は八の宮のもとを訪れるが、それは、かつては皇位継承候補でありながら光源氏の栄華の世界から追いやられた過去に基づく八の宮の道心を意識し、その経緯を自らの道心と重ねた上での訪問であった。つまり、薫と八の宮とは、その道心の背景に光源氏が君臨していた世界から疎外された暗部を持つ点で重なり合うのである。宇治十帖の発端において既にそうした暗さが読み取れるということは、宇治十帖、ひいては続篇の物語が光源氏の世界とは異質の「暗」の世界であることを示しており、薫の道心とはその暗さに包含され、主題的な位置を占めるものとは言い難い。そこに救済を約束するものではない道心を抱きながら、続篇の暗き世界に惑う薫の位相が読み取れる。

第三節 「^{ひとくに}外国にありけむ香の煙」を願う大君

総角巻には夢でも亡き父・八の宮に会いたいと切望する大君が語られている。その大君の思念には白居易の諷諭詩「李夫人」が引用されているのだが、この「李夫人」引用では「反魂の不可能」が示されてしまい、大君は最後まで八の宮を夢に見ることはできない。父の思想やことばに殉じたかのような大君であるにもかかわらず、ついに八の宮が彼女の夢に現われないということは、いかなる事態として意味づけられるのだろうか。

本節の研究は、冥界の父宮に会えずに嘆く大君に焦点を当て、「李夫人」引用の裏側にある大君、八の宮双方の論理を探り、その上で続篇世界の性質の一端を把握することを目的とした。

大君は思念に揺れを含みながらも（そうであるがゆえに切実に）亡き八の宮との再会を願うが、八の宮は妹の中の君の夢に現われる。そこには、中の君の行く末を気かけ、彼女を庇護しようとする八の宮の意志がうかがえる。また総角巻の他の箇所では、八の宮は自身の供養を依頼するために宇治の阿闍梨の夢に現われ、やはり大君は八の宮を夢に見ることが叶わない。結局八の宮との再会を願う大君の思念は冥界の八の宮の意志とはすれ違っており、大君は応答のない孤独な願望を抱いていると言える。そもそも「李夫人」がこの世からあの世への一方的な願望を描いている詩なのであり、その点で総角巻の大君は重なるのであった。

親子の隔たりとしては本章第一節で考察した弘徽殿太后に先蹤を見ることはできる。だが大君と八の宮の隔たりは正篇の場合と比べて深刻の度を増している。ここからは、親子といえども無条件に思いが重なり合うものではないとする続篇世界の性質がうかがえよう。

第四節 「椎の葉の音」を思い出す中の君

宿木巻では、匂宮と六の君との婚約のために苦悩し、宇治への帰郷を願う中の君が語られている。その一方で、物語の論理は中の君の苦悩の深刻化を抑制し、彼女を宇治から引き離そうとする。宿木巻の中の君の物語においては、中の君を宇治へと結びつけようとするベクトルと、都にとどませようとするベクトルとの「葛藤」を見出すことができる。

本節の研究は、そうした複数の方向性が輻輳する表現として「椎の葉の音」を捉え、和歌を参考にしてその分析を試みるとともに、宇治と都とに引き寄せられる中の君の生を意味づけることを目的とした。

「椎の葉」については既に宇治の生活を象徴するものという解釈が提示されており、それは妥当なものと思われる。ただし、古注釈『紫明抄』が掲げる和歌を参照したとき、そこには宇治の生活の象徴であるとともに、匂宮の愛情の不変性という解釈も浮かび上がってくる。さらに「とかへる」という歌語にも着目することで、宇治は、中の君がかつての家族と結びつく帰るべき故郷としてだけではなく、八の宮の庇護から離れ、夫となる匂宮を知り、女君として成長した地としても把握できる。

宿木巻の中の君は宇治と切り離されつつも、八の宮の「娘」として逝去した大君とは異なり、都で「妻」・「母」となる関係を築く。その物語は、家族や親子の隔たりの中から芽生える、新たな広がりの可能性を秘めているものとして意味づけられるだろう。だが同時に、それが可能性のまま閉じているところに続篇世界の性質が垣間見える。

第二章 薫の物語

本章は、続篇の主要な男君である薫に焦点を当てた考察を収めた。宇治十帖においては中心的な主題を担う存在として女君が重視されることが多い。そうした把握はもちろん妥当なものに違いないが、その裏面で薫がいかなる問題系と関連し、また男主人公としていかなる位相を担うのかといった考察がな

されてこそ、続篇の特質はよりの確に把捉できるはずである。本章は、女君に対する薫の執着のあり方などに着目しながら、続篇の男主人公としての薫の位相や、『源氏物語』以後の物語への薫の継承といった問題に考察を加えた。

第一節 執着する薫——「わがもの」「おのがもの」に着目して——

最終巻・夢浮橋巻で、直接ではないにしろ横川の僧都から「愛執の罪」を指摘される薫の執着とは、いかなる性質のものなのか。『源氏物語』が正篇から続篇にかけて次第に執着の問題系を前景化してゆくことからして、薫の執着についても正篇の人物との比較によってその具体相を闡明し得ると考えられる。

本節の研究は、最も端的に所有、占有の意を表すであろう「わがもの」「おのがもの」という表現に着目し、正篇の主人公・光源氏との比較のもとに薫の執着のあり方を浮かび上がらせること、ひいては正篇と続篇における男の執着の位相差を明らかにすることを目的とした。

「わがもの」「おのがもの」とは他者との競合や対立を背景にして多く用いられている表現である。重視すべきは、光源氏を主体とした用例が一例も見出せないことである。このことは多分に、光源氏が他の人物たちと同列の地点に立って競い合う位相にはいない、すなわち他とは一線を画して物語世界に君臨する主人公であることと表裏した事態であろう。対して、薫を主体とした用例は最も多く、それらは薫の関わる全ての女君（大君・中の君・浮舟）を対象としており、薫は宇治十帖全体にわたって占有の執着を表出している。薫において注意すべきは、大君たち宇治の三姉妹が当初から薫にとって何者かと競合する必要のない存在であったことである。にもかかわらず、薫は既にして〈わがもの〉にしていた女たちを自らが原因で〈よそのもの〉としてしまい、その後になって喪失を悔やむという行為を繰り返す。薫は光源氏の理想性に及ばない位相にいると言えるだろう。ここに、正篇の光源氏から続篇の薫へと至り、『源氏物語』が男の占有の執着を迷妄の度を増すかたちで語り出してゆく事態を見出すことができる。そして、この両者の執着のあり方の差は、正篇が光源氏の〈獲得〉によって物語が駆動してゆく世界であるのに対し、続篇が薫の〈喪失〉を原理とする世界であることと密接に関わっていると考えられる。

第二節 蜻蛉巻の薫——「ありがたの世や」と嘆く男——

薫の〈喪失〉の主題性が顕著に見出せるのは、蜻蛉巻である。宇治の三姉妹を回想し、その〈喪失〉を噛みしめる薫は、蜻蛉巻において宇治の物語を統括する男主人公として存在している。蜻蛉巻は、続篇の薫、ひいては『源氏物語』の男主人公が立ち至った位相を見定める上で看過し難い巻である。

本節の研究は、蜻蛉巻の薫の位相を、光源氏をはじめとする正篇の男たちとの連関のもとに見定めることを目的とした。

考察において着目した点は、「難いものかな、人の心は」「ありがたの世や」等と嘆く薫の思念である。理想的な女はめったにいないものだという男の嘆きは、正篇では「雨夜の品定め」（帚木巻）と女三の宮降嫁以降の紫の上をめぐる物語（若菜上・下巻）とに際立って集中している。理想的な女性として藤壺を光源氏の心中に結像させるに至った「雨夜の品定め」の男たちのことばは、若菜上・下巻に入ると紫の上の担う苦悩の側から相対化され、空転してしまう。蜻蛉巻の薫の嘆きはそうした男たちのことばを受け継いだものであり、もはや物語を駆動させる力はそこになく、物語の終息に関わって用いられるほかはない。ここに、女の主題に相対化される続篇の男主人公としての薫の位相が見て取れる。だが一方で、薫のことばは女性たちの思念と対置されることのない極めて自閉したものであることも見逃せない。その限りにおいて薫のことばの持つ空虚さは暴き立てられることがなく、かえって薫は過去の女性たちを美しく回想する理想的な男君としても存在している。こうした点から、蜻蛉巻の薫の位相とは、

男主人公の相対化と理想化とが拮抗する地点として捉えることができる。

第三節 薫の執着の行方——『今とりかへばや』宰相中将論——

前節まで、薫の執着の具体相及び男主人公としての位相について考察を加えてきたが、薫の関わる問題系は『源氏物語』以降の物語にも受け継がれてゆく。

本節の研究は、『今とりかへばや』に登場する男君・宰相中将を取り上げ、匂宮の系譜に立つ宰相中将に薫から継承した設定、特に執着のありようを指摘した上で、その受容の意義を考察し、〈女の物語〉における宰相中将の位相を見定めたものである。

まず、異装を解除し女性として生きる主人公の女君に対する宰相中将は、匂宮的であるだけでなく薫的な位相をも担い、物語の掉尾まで含めて薫と重なる設定が確認できる。さらに、女君を「わがもの」として占有しようとするも結局は彼女を失ってしまう宰相中将の姿は薫に近いものである。本章第一節で確認したように、『源氏物語』中で「わがもの（おのがもの）」という執着と最も深く関わっているのは薫であった。〈わがもの〉として執着しながらもその思念を理解できずに女たちを喪失し、最後まで惑い続ける薫の姿を宰相中将は受け継いでいるのである。

宰相中将が薫の設定、特に執着を引き継いでいることは、その執着の対象が『今とりかへばや』の主題を担う女君であることから、〈女の物語〉の系譜と関わると考えられる。先行する〈女の物語〉の女主人公たちを女君が継承することと表裏して、宰相中将もまたそれら主人公に対する男の執着を受け継ぐ存在として造型されている。特に宇治十帖全体にわたって恋着する薫の執着が宰相中将に継承されることは、『今とりかへばや』の女君を宇治の女たちに連なる存在として位置づけることとなる。薫の執着の継承は〈女の物語〉の系譜に不可分に寄り添うものと言えるだろう。

宰相中将の執着は薫以上に露わに表出される一方、薫とは異なって最終的には女君に乗り越えられる。この点で宰相中将は、本章第二節で考察した薫の地点以上に相対化された男であり、〈女の物語〉の男の一つの極に位置していると言える。

第三章 浮舟の物語

本章では、浮舟に焦点を当てた考察を収めた。『源氏物語』最後の女君である浮舟は、女性の出家、母との関係、そして物語最後の沈黙など、実に多様かつ重要な問題系を担っている。本章は、浮舟が出家を果たしてもなお苦悩や煩悩を抱えること、そしてそうした問題を主題化する物語の眼差し、また、物語最後の浮舟の位置づけ等について考察を加えた。

第一節 かぐや姫と仏伝

本節では、浮舟を論じるに先立って、『竹取物語』における仏伝（釈尊伝）の受容とその意義を検討した。次節で考察するように仏伝は浮舟の物語にも受容が確認できる。その意義を明確に捉えるために、『竹取物語』における仏伝の受容との対比が有効と考えられる。

物語の始発部における放光や致富など、かぐや姫の有する特質は仏伝における釈尊と重なる点が複数認められる。両者の重なりは始発部に限らず、それと呼応するように、かぐや姫の退場を意味する昇天の場面にも数多く指摘できる。

仏伝の受容はかぐや姫と翁の別れと悲嘆に特に深く関わるのであるが、注意すべきは、その悲嘆が仏教では「恩愛」という断ち切られるべき心情であるのに対し、『竹取物語』では物語の枢要な位置を占めていることである。そこには仏教思想に抗う思考を確かに見出すことができる。『竹取物語』に人間

性への愛惜を見る解釈は仏伝を介した観点から補われるべきであろう。『竹取物語』の主題は、あくまでも彼岸ではなく此岸、月の天上世界（「かの国」）ではなく地上世界（「この国」）に重きを置く思考から生み出されているのである。

本節の研究によって、『竹取物語』における仏伝の受容とは、その主題形成の過程で切り結ぶべきものであり、物語文学としての『竹取物語』の創造に抜き難く関わっていたものであったことが明らかとなった。

第二節 浮舟と仏伝

本節では、浮舟をめぐる物語の構想の背景にあるものとして仏伝を指摘し、前節において検討した『竹取物語』と比較しながら、仏伝をとおして浮かび上がる問題について考察を加えた。

これまで『源氏物語』における仏伝の受容やそれとの比較検討については、正篇の光源氏、あるいは手習巻を中心になされてきたが、続篇の浮舟巻以降の構想の背景にも仏伝の受容は確認できる。本節では、夢浮橋巻までも含めた随所での仏伝との重なりを新たに指摘し、家族や異性から独り離れて帰還を拒む出家者の物語を仏伝が支えていることを確認した。

だが、右のような重なりが認められる一方で、その内実が釈尊とは異なり執着を断つことのできない浮舟の姿に注意しなければならない。薫への複雑な感情のみならず、何よりも母・中将の君への思慕が出家後も心を占める浮舟は、釈尊のように「恩愛」から脱する存在ではない。仏伝と浮舟の物語とのそうした距離は、救済を中心に据えるのではなく、むしろ苦悩や煩悩へと注がれる物語の眼差しを浮かび上がらせる。それは前節で確認した『竹取物語』の主題形成の方法と重なるものである。仏教理念からこぼれ落ちるものをすくい上げ、主題として昇華させるところに、物語文学の特質が認められよう。

しかし、同じく仏伝を受容しつつも、『竹取物語』がかぐや姫に〈遺された者〉たちに焦点を当てているのに対し、『源氏物語』では、男や母を〈遺して去っていった者〉である浮舟を中心にして物語が紡がれてゆくという差異は看過してはならないだろう。そこには、出家し、仏道に入ってゆく者にこそ苦悩や煩悩が主題化するというアイロニカルな視点が認められ、浮舟をめぐるのは正篇の光源氏以上に「生の現実」を見つめる物語の眼差しは厳しくなっていると言える。

第三節 手習、夢浮橋巻の浮舟——「ほろほると泣き」合う母子——

前節では、仏教とは距離を取っている浮舟の物語のあり方を確認した。では、救済が問題とされない物語の中で、浮舟は最終的にどのような地点に行き着くのだろうか。男や母を遺して去っていった浮舟を語る手習巻及び夢浮橋巻についての詳細な分析が要請される。

本節の研究は、浮舟の沈黙と母・中将の君への思慕という物語の最終局面において重視すべき二つの問題系を考察の俎上にのぼせ、両者を連関させることで物語最後の浮舟の位相を見定めることを目的とした。

手習巻では、横川の僧都や妹尼たちによって浮舟の美貌が仏教的に意味づけられてゆくが、同時に手習巻に登場する中将の視線に晒されることでその美貌は男の欲望の対象ともなる。浮舟は人々の欲望を誘発する「女の身」の問題を担い続ける。そうした中、浮舟は過去に関わった人々を回想し整序することをおして、それらの人々を超えて思慕する対象として母・中将の君を心の中に位置づけてゆく。この時点の浮舟において念仏は思いを紛らわせる行為に過ぎないのであり、仏教は彼女の心に大きな位置を占めてはいない。母への思慕が最も高まるのが、夢浮橋巻で小君を目の当たりにして浮舟が「ほろほると泣く」場面であろう。これは、気を許せる身近な人物に対する、「泣き声」を伴う行為であると考

えられる。実は中将の君もまた東屋巻で浮舟のために同様の行為をとっており、遙かに巻を隔てて、表現のレベルで母子は向かい合っていると見える。それは物語が許す、遠く離れた親子が呼応できる限界と捉えられよう。その直後には再び異性関係の中に取り込まれ、浮舟は沈黙してゆくこととなる。浮舟の沈黙とは、彼女が母を思って泣く「泣き声」が響かなくなる地点であり、抵抗と呼べるほどの力をそこに読み取ることはできない。そして、沈黙する浮舟には彼女を〈わがもの〉と思う薫の執着が覆い被さる。最後の浮舟の位相は、その前途に心の安寧を期待することのできない地点と言えるだろう。

以上の各節から得た成果をさらに連関させ、続篇の特質を描き出してみたい。

これまでの各節による分析から見えてくる続篇の特質とは、光源氏の君臨する世界とは反する性質を基盤としたものと言える。第一章第一節ではそうした性質が正篇においても胚胎していたことを確認し、第一章第二節では薫の道心をとおして続篇が反光源氏的世界であることを把握した。続篇は、光源氏のように物語の中心に位置し、物語を全的に統括する存在を持たない世界であり、そこには求心力が作用しない。よって、続篇では各登場人物の物語が一つの物語の中に収まることがないために、正篇以上に各々の物語の間には齟齬やずれが生じる。その様相は、第一章第三節で大君に即して考察したように親子の間にも及ぶ。そうした観点からすれば、続篇とは人間関係の〈隔絶〉を本質的に孕んでいる世界と言え、その点に特質が認められるのではないか。第一章第四節で検討した中の君については、家族以外の新たな結びつきの可能性が秘められていたが、それが主題として追究されずにあるところに続篇の特質が逆に垣間見えよう。

正篇・続篇二つの世界の差異を如実に表すのは、薫である。薫においては、第二章第二節で考察したように、理想的な女性のいないことを嘆く点で正篇の男たちからの継承や連続性が認められるが、正篇以上に位相の相対化が進んでいる様相もまた確認できる。蜻蛉巻ではその相対化も理想化と拮抗していたものの、物語の終末では迷妄の姿を晒す薫が語られている。その薫が抱いていたものが女君たちに対する〈わがもの〉という執着であり、ここに光源氏との位相差が判然と見て取れることは第二章第一節で論じたとおりである。そして両者の位相差の背後には〈獲得〉と〈喪失〉という物語世界の原理の違いが認められた。第二章第三節で論じた、薫の執着の継承者『今とりかへばや』の宰相中将もまた女を喪失する男であるが、その執着が主人公の女君に乗り越えられてしまうのに対し、薫の執着は最後まで浮舟を追いつめる。〈喪失〉に基づく薫の執着は続篇（宇治十帖）全体、そしてその先まで覆っているほどに深い。このことからして、〈喪失〉という原理も続篇の特質と見られるだろう。そして、薫の執着に追いつめられる浮舟については、仏教による救済や悟りが物語の中心とならないことがまず注目される。仏教からこぼれ落ちるものを主題化する点に物語文学の特質があることは第三章第一節、第二節で論じたとおりであるが、出家した浮舟の場合はその主題が正篇の光源氏以上に厳しく突き詰められている。ここにもう一点続篇の特質として〈仏教の相対化〉を見出すことができると考えられる。

以上のように、本研究は、続篇の特質として、人間関係の〈隔絶〉、薫の執着に基づく〈喪失〉、浮舟の物語に見られる〈仏教の相対化〉の三点を挙げたが、実にこれらの複合の帰結として語られたのが手習巻、そして夢浮橋巻の浮舟がいた地点であると考えられる。すなわち、第三章第三節において考察したように、出家を果たしてもなお過去の異性関係の記憶に引きずられ、「阿弥陀仏に思ひ紛らは」すと語られる浮舟にはもはや仏教は救済を差し伸べるものではない（〈仏教の相対化〉）。このとき浮舟は、「ほろほろと泣く」という表現の連関によってかろうじて母親との呼応が語られるが、それは極めてはかない呼応であり、浮舟は変わらず孤独な位相に置かれてしまう（〈隔絶〉）。そこで沈黙する浮舟を追いつめるのは、彼女を喪失したことを引きずり〈わがもの〉として取り返そうとする薫の執着であった

(〈喪失〉)。

特質の複合しているかかる地点は、いわば最も続篇らしい地点なのであり、続篇世界の極致と言えるだろう。ここで浮舟はこれまでの女君のように死や出家を与えられて物語から退場するのではなく、複数の特質が重なり凝集することで行く末の安寧が押しつぶされる、逼塞した地点に据えられているのである。

以上、各節の考察から上記の三点を続篇の特質として特に明らかにし、『源氏物語』の終末部をそれらが複合する地点として提示し得たことが本研究の最終的な成果である。

論文審査結果の要旨

本論文は、『源氏物語』の表現形成の動態を捉えるという展望に立って、その続篇世界（匂兵部卿宮巻～夢浮橋巻）の特質を考察した論考である。論者は、光源氏が君臨する正篇世界から離脱した登場人物たちに注目し、『源氏物語』の記述を丹念に読み解くなかで、その離脱に伴う喪失の内実と閉塞への過程を精緻に捉え出し、続篇世界に開示される心の闇の深さ、救い難さに物語としての重要な意義と特質を見出している。本論部は、三章十節から構成されている。

第一章は、光源氏の栄華の世界からはみ出した登場人物たちの行動と心情を多角的に考察することで続篇世界の特質を捉えようと試みた四節の考察から成る。第一節は、光源氏の敵役として正篇世界に登場する弘徽殿太后に注目し、単純な負性だけではなく、抗争の意図と敗北の孤独、悲哀が描き込まれていることを明らかにして、その描写に続篇世界との深い結びつきを見出している。第二節では、宇治の八の宮と薫との密接なつながりを重視して、薫の道心なるものが光源氏の道心とは異質であり、そこに、正篇世界とは異なる、続篇世界の救い難い暗さが見出されることを論ずる。第三節では、正篇世界には見られないような親子関係の齟齬、隔絶が、宇治の八の宮と大君との間に認められることを明確に提示し、第四節では、中君が、自らを育んだ地、宇治への帰郷願望を抱き、その思いに囚われながらも、都で新たな関係を築くことに、物語の展開上の重要な意味を見出している。第二章は、続篇の中心人物、薫の位相を論ずる三節の考察から成る。第一節では、薫の願望を表す「わがもの」、「おのがもの」という表現に注目して、正篇と続篇との間の男の執着の位相差を明らかにし、続篇世界の原理を〈喪失〉であると規定している。第二節では、薫にかかわるその〈喪失〉の問題が最も顕在化する蜻蛉巻の記述を問題にして、女の苦悩を語る視点から相対化されつつも理想化され続けるという、続篇の男主人公としての薫の位相を捉え出している。第三節では、執着する存在としての薫の人物像が、『源氏物語』以降の物語、『今とりかへばや』の宰相中将の人物像に受け継がれていることを明らかにして、物語文学における執着という問題の重要性を論じている。第三章は、『源氏物語』の終幕の意味を探るという関心にもとづいて浮舟について論ずる三節の考察から成る。第一節は、『竹取物語』の仏伝（釈尊伝）の受容のあり方を論じ、第二節では、『源氏物語』の浮舟をめぐる記述の仏伝受容の性格を検討して、『竹取物語』が遺される者たちの苦悩を描いているのに対し、『源氏物語』が去り行く側の浮舟の苦悩を主題化していることを明らかにしている。また、第三節では、物語の最終部で、浮舟が母を思って泣くことと、その直後の、薫とのかかわりが問題になる場面で沈黙することを重視して、救済や悟りを主題化することのない『源氏物語』の特質を提示している。

以上のように、明確な展望のもとに着実に論証を積み重ね、『源氏物語』の特質を提示した本論文の指摘はきわめて説得的であり、そのすぐれた成果が斯学の発展に寄与することは疑いを容れない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。